

## 二木島祭の変容に関する一考察\*<sup>1</sup>

安富 俊雄\*<sup>2</sup>

### A Study of the Transition in the Nigishima Festival\*<sup>1</sup>

Toshio Yasutomi\*<sup>2</sup>

The Nigishima Festival, which is held in Nigishima, Kumano City, Mie Prefecture, is one of the four biggest ship festivals in the Kumano area. This festival is designated as one of the important cultural properties in Mie Prefecture. It has been handed down on two shrines, Moroko-Jinja and Akoshi-Jinja, which are located on both sides of the mouth of Nigishima Bay. During this Festival, people have offered their fervent prayers for a large catch of fish and safety during the voyage.

This festival, however, is obliged to accept various changes, following the transformation of the social system. The ceremony has become simplified, and original patterns of the festival have been changing. For example, the boat race, the main event of this festival has been losing its attractiveness as in old days. In the past the race was very exciting, so each team in the region competed very intensively trying to be the winner of the match. Being the winner brought much honor. Now, however, the race is nominal, and not very competitive.

There seem to be some reasons for that. Now, more young people are moving to big cities, and fewer stay in their hometown. Due to the decrease in the young population, the system of the society cannot help but change. Also, today's young people have been losing their interest in such festivities, and have become less anxious to inherit the traditional events.

Consequently, this trend among young people has been making the management or the maintenance of this festival very difficult.

It's also natural that the forms and patterns of the festival should be actually changed in this depopulated community. Although, in the future, more and more changes will occur in Nigishima Festival, we need to observe its course and record such transformations.

## はじめに

20世紀後半における科学技術や経済の飛躍的發展、高度情報化の推進は、われわれ人類がかつて経験したことのない急激な社会変化をもたらしている。その結果、われわれをとりまく社会・産業構造も大きく変化し、当然のごとく生活構造にも大きな影響を与えた。それはまた、これまで人類が営々と築いてきた生活形態や慣行等にも大きな影響を及ぼしている。すなわち、これまで地域で育まれ継承されてきた伝統文化が社会変化や世俗化にともない継承が困難になったり、消滅しかけたりしている。

筆者はこれまで西日本を中心に伝統的舟競漕の調査をおこなってきた。舟競漕がおこなわれる舟祭り行事はいうまでもなく海域に面した地域の祭であり、かつて海の交通が盛んであった島々に多い。しかし今日では、かつて隆盛をほこった島々も漁業や海運業の衰退により、人口の流失が著しく現代社会から取り残されようとしている。加えて昭和初期からの動力船の導入はこれまでの舟の役割を大きく転換させることになった。そのため、それまでの伝統的な手漕ぎ舟がほぼ消滅の運命にある。したがってこれまでのような伝統的な行事の継承も困難になりつつある。このような状況からしてやがて消失するだろう運命の祭礼は数多い。また、継承したとしても年々様々な事情から簡略化が進み、表面上は原形を保ちつつも内実的にはかつてのような内容の伴った姿は影をひそめ外見を整えた観光用のもに变化している。これも社会変化の遺物だろうか。今日の急速な伝統文化の変容消失を憂うばかりだ。

ここでは、この10年のうち4度訪問した熊野市二木島（にぎしま）の祭礼を取上げ、祭礼の変容とその背景について考えてみたい。

### 1

二木島の祭礼は熊野の四大舟祭りの一つに数えられ、三百年の伝統を持つ祭りとされ、昭和56年には三重県重要無形文化財に指定されている。

この祭りの内容については拙稿「二木島祭り」を参照していただきたい<sup>1)</sup>。だが、簡単に概略すると、二木島湾にある二木島、二木島里、甫母（ほほ）の三地区による祭礼で、二木島と二木島里・甫母から各一人の当人（当地ではショウドという。二木島里と甫母は一年交代）を選び、湾の出口両側にある室古神社、阿古師神社へ渡御し、その途中、還御の折りに三度にわたって舟競漕をおこなうもので

ある。この祭礼は当屋の儀礼と御神幸の際の舟競漕に大別される。そこで当屋とショウドをめぐる儀礼と舟競漕における変容とその背景について述べてみたい。

では、二木島祭りが時代の推移のなかでどのように変容しているか見てみたい。

まず祭日について、わが国では旧暦をまもっておこなっているところもあるが、今日では多くは新暦に変わり、しかも休日におこなっているところが多い。二木島も昭和54年より11月3日になった。

二木島祭は本来、年2回、一年を二つに分けて（旧5月5日、11月2日）おこなわれていたが、ショウドが毎日精進潔斎をしかも半年継続することが難しいことから昭和44年より年1回になった。そしてショウド決定も祭前1月前とされていたが、現在では1週間から10日前に短縮されている。したがって精進潔斎の期間も1週間余となっている。それでもショウドを引き受ける人は少なく、年によってはくじ引きによって強制もある（年2回おこなわれている頃は祭りが終了するとすぐに、次のショウドを決めた。希望者が多く、役目をはたすことは名誉なこと、御利益があるとされた）。今日の二木島・甫母地区ではすでにショウドの順番がきまっている。ちなみに年2回の名残として現在は5月4日に漁協組合の主催で子どもの舟競漕がおこなわれている。

この地方では現在でも当屋制度が残存しているところが多々あり、二木島に隣接する新鹿町にも残っている。ショウドの条件は以下のとおり本来きびしいものであったが、条件を満たす人が減少し徐々にショウドの義務もルーズになってきているのが実情である。特に働き盛りの階層はむずかしく、現役を引退した人たちが担っている場合が多い。



写真1 二木島の全景

当屋選定には次のような条件を満たさなければならなかった。

1 本村住民で二代以上居住するもの。

1 夫婦そろっているもの。

1 過去一年以内に親近者の死者なきもの。

また当屋に選定されると次のような心得を守らねばならなかった。

1 当を受けたる者は心身共に新たにして誠心誠意神社に奉仕すべし。

1 せうどは注連附祭より祭典当日迄朝夕二回祭典終了より次の注連附祭まで朝又は夕一回垢離を執り神社を礼拝し村内安全氏子繁盛の祈願をなす。

垢離は海岸の垢離場にて衣服を脱し海に入り行ふ垢離後淡水にて潮水を洗ひ流しその桶に海水若干を汲みて神前及家中の修拔をなす。

1 せうどは夕垢離より朝垢離までの間は他家に行く事を許さず。但祭典後は此の限りにあらず。

1 せうどは頭髪髭等に刃物を当てず。但止むを得ざる事故のため、代人をして垢離を執らしむる時は此の限りにあらず。

1 せうどは凡ての不浄を避く因に不浄の人とは交語せず。

1 家族中月経の者ある時は注連附祭よりは九日間御仮敷建てより祭典までは十二日間別居せしむる事祭典後次の注連附祭までは三日とす。此の場合は火替へをなす。

1 村内に死人ありし時は火替へをなす。

1 せうどは焼煮せる到来品を食し又は他家にて飲食することを許さず喫煙は他家の火を用ひず。

1 せうどはネギ、ラッキョ、ワケギの類を食し及家内に入れざる事魚類は○を忌む。

1 当屋に於ては薪は香花（シキミ）くろもじを使用せざる事。

1 せうどは祭典当日出立ちの式後祭典終了沖上がりの式まで飲食せず。

1 せうどは祭典奉仕後三年間宮籠りの行事に奉仕する事。

1 当屋には婆婆を委嘱し毎月の行事及祭典等一切の行事の指導並びに実施と甘酒造りを担当す。

往古は老婦なりしも今は男子に代へたれども婆婆と呼称す。

1 当屋にはサカイキハヤシを選定し毎月の行事及祭典の時は必ず従はしむ。

又せうど事故ある時垢離の代理を勤めしむ。

親戚又は知己の中より十数歳の男児を選ぶ。

1 新しき筵を用意し神官祝詞奏上の時に用ひ及祭典には

せうどの座席に用ゆ之らを浄め筵と称す。

1 祭典の際奉仕するガズトモ、ガズ付き、踊り子を選定す。ガズは往古は妻なりしが中古より娘をして代行せしむ。娘無き時は親戚中より選ぶ。トモ、ガズ付き、踊り子も同様親戚の者として選ぶ。

1 御統玉は川柳にて造る。

1 かけの魚は二尾あて縄にて結び十二懸けとす。

以上のような条件や心得も徐々に簡略化され、割愛されることが多くなっている。

ショウドの選定にあたって、大正期までは大前という本家筋を中心にしていたようだが、時代の推移とともに受ける本家筋が減少し、選定は条件を満たす家であれば誰でも可能になった。ここで触れておかなければならないことは本家筋がショウドを担っていたのは理由があった。それは、一言でいえば引受の条件を満たすにはかなりの人と経済力が必要であったことである。つまり祭礼の準備をはじめ、祭礼日に至るまでの諸行事などショウドはもとより、それを世話する婦人方の労力や経費は並大抵のものではなかった。そのうえ親戚が加勢しなければならず、その加勢も大勢の加勢が必要だった。

加えて、台所だけでなくガズ、ガズトモ、ガズ付きといった神役も多くを身内から出さねばならず、このことから、かなりの人的支援がなければ引き受けることはできなかった。以前は神役も身内しかも村内の嫁ぎ先等でまかなうことが可能であったものが、今では多くの子どもが関西や東海など都会へ嫁いでいるため地域外、しかも遠方から神役を選出するまでになっている。

しかし、ショウドを始めとして神役など過重な負担を今後継続することは不可能なため、祭礼の制度改革をはかる



写真2 神役の儀礼(室古神社)

ことになり、平成5年より祭礼費（これまでのショウドの個人的負担を各戸が「志祭」という形で一定の負担をする）を公的負担に変えた。さらに神役も個人（ショウド）の身内による選出から各地区による分担選出になった。つまり個人当屋を中心におこなわれていた祭礼が地域全体でおこなわれるように大きく変容した。

ところが、このような制度改革は伝統的な当屋制度を変容すると同時にそれに関わる人々の心をも変えていった。つまり、これまで厳粛に守られてきた儀礼の厳肅性がなくなった。こうして祭礼を取り巻く人々の神事への取り組み方も簡素化の方向で一気に加速していった。

祭礼の変容の主だったところは表1のとおりである。

表1 二木島祭の主な変容事項

変容項目	過去	現在
精進潔斎	半年	1週間
経費	当人負担	各家負担
神役	当人の親族	地区全体
当人選出	祭礼後	1週間前
まかない	当人宅	公民館
舟漕ぎ	青年	壮年
注連つけ	月1本で7本	10月28日一緒にする
舟の乗員	40人余	33人
ク	地区だけ	全地域
服装	裃	ショートパンツ 腹巻

この他にも調査したここ10年で変更された点をあげると、宵祭りでの神官の不在、同祭での出席者の減少、同祭での時間の変更（演芸会のため時間を早める）、諸役の服装の軽装化、神事での食器（箸、うつわ）の現代化、カケウオの儀礼の省略、ズズのかげ忘れ、本祭早朝の垢離とりと身支度の順序の逆などなど数え上げればきりが無い。

次に舟競漕についてみてみよう。舟競漕に関しても大きな変化がみられる。まず第一にあげられるのは競漕の原点である地区対抗形式が崩れたことである。つまり二つの地区が二艘の舟に分けられて長く競漕をしてきたが、漕ぎ手不足から他の地区からの応援を仰ぐようになり、本来の競争意識が希薄になってきた。そのため練習にしても形式的になり、ひいては漕ぐ技術の伝承も難しくなっている。

第二に室古神社沖から阿古師神社へ向かう途中で競漕が

おこなわれるが、競漕に際し神役の当人とサカイキハヤシ以外は別舟で移動することである。以前は競漕舟の暗い舟底に待機したというが人権上からか今はない。

また漕ぎ手の服装は本来的には裃一つであったろうが、今では腹巻にタンパン姿である。そして一丁櫓に3-4人の漕ぎ手がついていたが、その数も減少気味である。

この競漕の漕ぎ方は圧巻である。1丁に3人がとりつき、1人が十数回漕ぐと櫓腕の方へ移動する。そして、櫓腕に近い人は、残りの2人の股間をくぐって、ロギの方へ移動する。そして、また十数回漕ぐと順次3人が移動するのである。この漕ぎ方は、緊急時の場合であろう。ふだんは見られない。

また、こうした漕ぎ方は、対馬や愛媛県津島でも見ることができた。

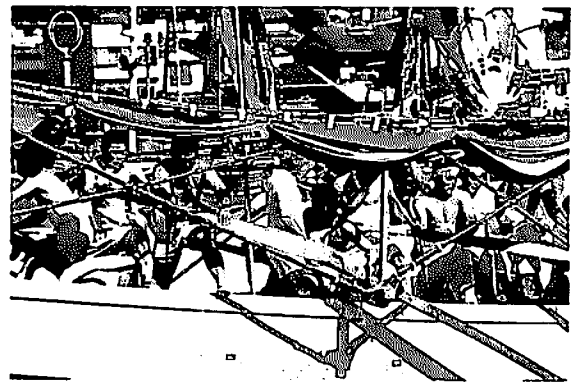


写真3 3人による櫓漕ぎ

乗員は本来20歳前後の青年であったが、今日では壮年者中心になっている。

ちなみに平成9年の乗員の年齢と職業は次のとおりであった。

〈二木島〉

50歳代	6人	養殖業	9人
40	14人	土木業	6人
30	7人	漁業職員	5人
20	7人	公務員	3人
		運搬業	3人
		会社員	3人
		自由業	2人
		漁業	2人

表2 二木島地区の職業と年齢構成

(平成7年国勢調査から)

職種と年齢 地区	農	林	漁	建	製	運通	卸小	金保	サ	公	15	25	35	45	55	65	75
	業	業	業	設	造	輸信	売売	融険	ービス業	務員	}	}	}	}	}	}	(歳)以上
甫母(99人)	3(人)		45	1	14	21	6	1	7	1	2	5	20	30	29	12	1
二木島里(57)	1		28	5	8	1	5		8		0	4	10	21	11	10	1
二木島(276)	18	1	46	41	55	20	45	1	43	6	14	27	37	62	80	42	14

〈甫母〉

70歳代	1人	漁業	26人
60	13人	養殖業	4人
50	8人	会社員	2人
40	7人	土木業	1人
30	2人		
20	2人		

もう一つ大事なことは、「沖上がり」(祭礼終了後の賄い)に代表されるような賄いを当屋宅から公民館に移行したことである。つまり個人(当屋)賄いから地区主催の賄いに移行した。これは経済的・人的負担の大きな軽減である。

以上のように、祭礼はある個人を中心としたものから地域のものへの転換を余儀なくされている。それは、さもなくば祭礼(伝統)の維持・継承が困難なことを表している。

## 2

これまで二木島祭の変容について述べてきた。その変容についてはさまざまな要因が考えられるが、なかでも社会変化によるものが大きいと思われる。千葉徳爾は「文化変容は地域住民の生活条件なり、社会構造なりの変化によって著しく認められる場合が多い」と述べている<sup>3)</sup>。

そこで、ここでは二木島祭の文化変容の背景について社会構造の変化を見ながら考えてみる。

二木島は熊野市の北東の端に位置し、現在は熊野市に属するが、それ以前は旧荒坂村であった。熊野は険しい山々が海に迫る所が多く、二木島も例外ではない。昭和34年にJ R紀勢本線が開通するまでは陸の孤島であった。現在も熊野市街へ通じる陸路は細い道路が一本だけである。村はリアス式海岸の奥の谷に開けた僅かな土地に家が密集している。山の斜面には荒れ果てた段々畑の痕跡を見ることができ、高度経済成長期までは多くの家が半農半漁

であった。しかし二木島里・甫母地区は開墾する土地もほとんどなく専業漁業が多かった。

この一帯は黒潮の押し寄せる難所であったが、リアス式海岸の奥の深い二木島湾は昔から上方から江戸へ向かう樽回船や漁船の避難場所であった。二木島は風待港として栄え、外国船も入港したほどである。明治期には遊廓が6、7軒あったという<sup>4)</sup>。

また熊野は古くから捕鯨の盛んな所で、明治の末期には捕鯨工場が建設されるなど、この時期が二木島がもっとも栄えた頃であろう。大正期に入り捕鯨も徐々に下火になっていった。同時に同地の繁栄にも陰りが見え始める。以上のような歴史を辿りながら、現在は漁業を中心にした産業が営まれている。

現存する資料から人口動態をみると、慶長時代344人であった人口が大正元年2084人、大正14年1826人、昭和20年2225人、昭和30年2350人をピークに徐々に減少し始める。そして平成2年1066人であったが、平成7年には千人を割り平成9年には904人と急速に過疎化が進行している。うち高齢者は33%にのぼる<sup>2)</sup>。

産業構造も大きく変化するが、特に農業は昭和35年では459戸中226戸が営みうち専業が23戸、残りは0.3ヘクタールの超零細農業であったが、平成2年では376世帯中47戸に急減し、専業も10戸だけになった。この間、高度経済成長は交通網の発達も手伝って青年層の流出に拍車をかけた。それは今日も続いている。高校を卒業して当地へ残留するものは第1次産業からの脱皮がはかられ熊野市を中心に通勤する人が多くなった。

平成7年の国勢調査を見ると、二木島地区は熊野市を中心に地元以外に職を求め職種もバラエティに富んでいる。しかし二木島里・甫母地区では以前と変わらず漁業従事者が多い。これは沖合漁業と共に現在タイを中心とした養殖業が盛んなためであろう。これが今の二木島の経済を支えていると言っても過言ではない。表2からも三地区ともに中高年が多く、青年層が少ないことがわかる。

青年層の減少は町の活力にも多大な影響を与えることは明らかである。したがって祭礼に対する支援母体として青年層の欠如は自ずと祭礼の活性化を損なっている。それでも祭礼を継承しようとするとき現状では中高年層の力が不可欠で、以前青年が担ってきた部分を中高年が代わって行っているのが実情である。これは全国の地域どこにでもみられる光景で二木島に限ったことではない。しかしそれでは祭礼が長続きするはずはなく、年々変更を余儀無くされている。言い換えれば、青年層の減少はこれまで地域生活の原動力であった青年組織の崩壊をもたらした。そして、それは祭礼を始め地域の年中行事を大きく変えていった。二木島においても当然青年組織の役割は重要であった。

『熊野市史』によれば、二木島では「若い者の集まりを若連中（または若い衆）と呼んだのは明治37年までで、その後は青年会と呼ぶようになった」、さらに「男子満15歳で加入し30歳まで会員で・・・宿には一軒に5、6人ずつ泊まった。行動としては正月5日の石取り、正月と6月の14日の夜は午頭天王ごもり、5月と11月の村祭り、そして道なおしとか遭難船の救助などにも活躍した」と記されている<sup>1)</sup>。

戦後は青年会が青年団にかわったが組織自体にさほど変化はなかったようだ。団長の家で寝泊まりし、中学校を卒業するとほとんどの青年が入団した。ここでも地域生活の担い手として陰になり日向になって活躍した。昭和40年頃まではショウドに任命されると、乗員の選出等舟祭の舟の関係は一切人にまかせた。しかしその後、青年層の減少や青年層の職業の多様化により過去のような結束を求めることは困難になり徐々に崩壊していった。今は青年団に代わ



写真4 二木島の舟競漕  
日本で伝統的につづく舟競漕も櫓技術の習得が困難になり、櫓からペーロン系の櫓に変容した。

る組織はない。

ちなみに、大正15年の荒坂村青年会は16歳未満32人、20歳未満84人、25歳未満64人、25歳以上48人と228人の青年がいた。昭和29年で144人、平成7年では38人にすぎない。

こうした青年組織をはじめとする社会組織の弱体化が地域社会の活性化を損ねている。それはまた地域が営々と築き、引き継いできた伝統を崩壊させることにもなる。特に世俗化がすすむなかで伝統文化に対する関心が希薄になってきている。したがって伝統行事も厳粛な神事の部分が削愛されて俗的なイベント性を強めて残存する傾向がある。その証拠に祭礼のなかの競技性の部分がクローズアップされてシンボル化され維持されているのではなかろうか。祭礼が本来の姿をかえてきている。たとえば、マスコミで報道される現代の祭礼をみると、その中核をなしているのは競技であることが多い。裸祭り、喧嘩神輿、それに祭礼競技、どれをとっても厳粛な神事の部分は消え、あたかもスポーツイベントとしての色合いを濃くしている。

こうした傾向は祭礼を「町おこし」の一環と考える地域によくみられる。その意味では二木島の場合も神事性の強い当屋の行事は年々簡略化されて陰をひそめ、やたらと舟競漕が強調されている。

近年、熊野市では、この祭礼を「舟漕ぎ祭」と呼んでいる（この名称は新しい。熊野市教育委員会では祭り紹介に用いているが、地元ではあまり使用されていない。）ように、現在は舟競漕が祭りの中心になっている。前にも述べたように、この祭礼は当屋儀礼と海上渡御それに舟競漕からなっているが、本来はショウドを中心にした海上渡御であろう。それが競技に重点が置かれ神事儀礼はなおざりになっている。

繰り返しになるが、現代人は華々しい競技には興味があっても、厳かな儀礼には興味がないようだ。しかしそれを単に世俗化の一言でかたづける訳には行かない。たしかに祭礼の変容には世俗化も一因であろうが、こと過疎地域でみるならば祭礼の実質的遂行役である青年が減少していることが主因としてあげられよう。中高年に祭礼の主役を求めることは酷である。さもなくば、自ずと祭礼の継承には合理的なはからいがなされることも当然といえよう。地方の祭礼では、御輿が小型トラックに乗せられ御旅所まで行く姿をときどき見かけることがある。なんとむなし気もするが、祭礼の継承のためにはやむをえない処置であろう。

しかし、一方では伝統文化の継承が将来的にどのようになっていくのか一抹の不安を感じていることも確かである。

最後に、二木島祭典の収支決算書を付記する。平成4年までは当屋個人が行っていた賄いが、以後、各家の負担（志祭を一戸あたり3500円）でまかなわれるようになった。そして不足分については氏子総代会で負担することになった。先にも触れたが、各家が負担することによって二木島祭の様相変化が一段と加速した。つまり、当屋を中心とした祭礼から二木島の地域全体でおこなう祭礼に変化した。

平成9年祭典収支決算は次のとおりである。

〈収入〉	
志祭 318戸	1,323,600円
〈支出〉	
	1,424,640円
内訳	
関船修理代	117,700円
祭典保険	39,290円
沖上がり 経費	768,000円
	(賄い, 慰労など)
祭典当日着物結上げ	174,000円
その他経費	325,650円

赤字 (祭典準備, その他当屋関係)  
101,040円  
(不足分は氏子総代会で負担する)

## 謝 辞

二木島を訪問するたびに多くの在住の方々にお世話になった。特に二木島祭の保存に努められている北野博一、竹内捷二の両氏にはこの場をかりてお礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 拙稿：二木島祭，地域文化研究11，梅光女学院大学地域文化研究所，1995.
- 2) 平成7年国勢調査.
- 3) 千葉徳爾：地域と民俗文化，大明堂，1977.
- 4) 熊野市史編纂委員会：熊野市史，熊野市，1983.